

【68】石橋と洪水

九州では一般的なのに、他の地域ではあまり見られない土木構造物に、石積みのアーチ橋があります。大河川には少ないのですが、中小河川なら都市、農村を問わず九州各地にみられます。

石のアーチ橋は上からの力には強く、載荷重が少々増えたくらいではビクともせず、江戸時代の石橋に現代の大型トラックが載っても平気ですが、洪水流のような横からの力には弱いことが欠点です。

また、アーチ橋は河道の流過断面を狭め、流木などの流下物がひっかかり、橋の上流部の洪水を堰上げることになるので、洪水の円滑な流下の障害になりますが、このことはアーチ橋への横からの力を大きくすることになります。

昭和 57 年（1982）7 月の 299 人が亡くなった長崎大水害では観光名所の中島川の石造アーチの「眼鏡橋」が大きく破損し、撤去の是非をめぐって大論争になりましたが、結局、橋の脇にバイパストンネルを設けて洪水を分派し、橋自体は修復して残されました。

鹿児島市内に二級河川「甲突川」（こうづきがわ）というのがあります。流域面積 100 平方キロメートルで、中島川の 5 倍以上もあるかなり大きい河川ですが、川沿いの下級武士の屋敷街から大久保、西郷、大山といった明治維新の立役者を輩出したことで有名です。この甲突川には江戸期以来の立派な石橋が五橋も架かっていて治水上の弱点となっており、早くから移転を前提にした治水計画が立てられていましたが、重要な文化財でもあり決心のつかないまま放置されてきました。

そうこうしているうちに、平成 5 年（1993）8 月の大洪水で 5 橋のうち 2 橋が破壊流失されてしまいました。このまま手をこまねいていれば残った 3 橋もいずれ流失するのは目に見えていたので、河川管理者の鹿児島県も覚悟を決め、県知事を先頭に県民に訴え続け、市民団体やメディアの批判をのりこえ、3 橋は海岸近くの公園に移転されました。さんざん攻撃され奮闘された県知事は、引退後不幸にも病を得て東京に転居され、日ならずして亡くなられたのは残念でした。

文化財としての構造物を被災覚悟で原位置保存するのか、次善の策として移設するのかはこれまた悩ましい問題ですが、九州にはまだ多くの石橋が残されているので今後とも似たような話が出て来るでしょう。